

の二つのテーマはレーモンドの建築に関係のあるテーマであり、近代建築に関する研究を広げるために重要なものでもある。

そして、滞在中にもう一点調査を追加し、レーモンドの住宅作品を掲載した当時の建築雑誌の記事を収集した。『住宅』、『新建築』、『国際建築』という三つの雑誌について、網羅的に記事を収集することができた。建築の雑誌を網羅的に調べた理由は、レーモンドが活躍した戦前の日本で、日本人建築家たちが設計していた住宅建築の流れの中で、レーモンドの位置づけを分析するためである。

### 調査訪問の成果

一点目については、国立国会図書館の人文総合情報室に必要な情報を見つけることができた。その情報から施主の一覧表を作成して、論文の資料編に組み入れた。二

点目、三点目については、内田先生に参考文献を紹介していただいた。それらの参考文献を次の研究で活用する予定である。

四点目の建築雑誌の記事の収集については、この作業の過程で私にとって、大事な発見があった。軽井沢夏の家は、コルビュジェのエラズリス邸を一部模倣したものであることが知られている。しかし、これまではレーモンドがどうやってエラズリス邸の図面を手に入れたか、はっきりしていなかった。今回の調査で1931年11月号の『国際建築』誌に、エラズリス邸の図面が掲載されていることを確認することができた。したがって、レーモンドはこの記事によってエラズリス邸の情報を得たのであろうと推測している。これまで軽井沢夏の家については徹底的に調査をしたつもりであったが、一つだけ研究者として気がかりな点が残っていた。今回、それが解消されて嬉しく思う。

## 日本における現代の民間叙事の新しい発展

—神奈川県及び周辺のパワースポットを中心として—

楊 陽  
(華東師範大学)



近年、都市化が進むその一方で、伝統的な民間叙事（中国語の言い方）の生きる状況は厳しい局面に直面している。世帯を単位とする農村から高層ビルが林立する町に変化し、人々は毎日忙しい生活を送り、たくさんの娯楽施設が出てきた時代に、伝統的な民間叙事は生きるスペースを失い、消失しそうな状態に陥っている。実は、民間叙事は人間生活を直に描写し、歴史を間接的に記録し、人間の自由奔放な想像として、バラエティに富んだ形式で民衆の日常生活の中に根を張り、展開している。民間文学に関する分類は、日本と中国では一致していないが、ここでは研究のため、神話、伝説と民間の故事を含める、広い範囲で民間故事を研究対象にする。

パワースポットは日本で人気が高い観光スポットとして、自然が豊か、霊験あらたかな場所とされている。これらの場所を訪ねると、自然から体にエネルギーが注がれ、自分の運もよくなると信じられている。パワースポットは大まかに分けて三種類ある。

(1) 自然風景。日本で有名な富士山や琵琶湖など、昔から神話や伝説が伝わってきた大人気の場所である。(2) 神社と寺院。日本には神社が幅広く分布し、仏教が広く伝播されているため、寺院の数も少なくない。歴史感があふれ、由緒がある神社と寺院は観光名所になっている。例えば、鎌倉の江ノ島神社、鶴岡八幡宮などである。(3) 現代の観光スポット。観覧車、スカイツリー、東京タワーのように新しい都市の文化と文明を代表し、都市或いは国のシンボルとなっている。

前二種類のパワースポットは歴史が長く、そもそもそれと関わった神話や伝説もあり、或いは発展しているうちに、自然や人の影響により、変化が起きている。第三類のパワースポットの民間叙事は、ほぼ現代人によって作られ、都市の中から生まれたものである。

筆者は神奈川県周辺の有名なパワースポット——鎌倉市の鶴岡八幡宮、江ノ島神社、東慶寺、銭洗弁財天、葛原岡神社、雷門浅草神社、スカイツリー、東京タワー——を調査して、現代の日本人がパワースポットにメンタル的な要素を求めていることを強く感じた。また、中国、日本、及び世界の国々で、民間の口承の伝統が現代において、どのように変化するかという課題について、新しい視点とフレッシュな資料を手に入れた。

以上のフィールドワークと文献資料により、結論を三点にまとめた。

①新しい叙事の生まれは、伝統の延長のみならず、現代の人々の精神的、物質的な要求と繋がっている。②経済の発展が民間信仰の習俗と関わり、観光産業を促進していると同時に、伝統叙事が伝えられ、新しい発展も起きている。③新しい時代に生まれた民間叙事は内容が現代の生活と密着し、多彩な表現力を備え、より魅力的になり、その生命力が盛んになっている。

最後に、神奈川大学日本常民文化研究所付置非文字資料研究センターから貴重な訪問の機会をいただき、誠にありがとうございました。勝手にわからない国とその民間文化の発展を短時間で理解することは難しかったが、



各調査地へ赴き、調査を行い、それにより基本的な知識を身に付けることができました。今回の訪問により、日本の民俗学研究では、新しくできたものを速やかに把握して

いることに感心し、これからの研究生活に活用しようと思う。

## 日本滞在記

梶 曉 藝

(ブリティッシュコロンビア大学)



ブリティッシュコロンビア大学の大学院で、アジア研究をしている梶曉藝と申します。2014年12月1日から18日まで、交換研究員として神奈川大学非文字資料研究センターに滞在しました。

私は現在、19世紀韓国における国際法の発達に焦点を当てて研究をしています。韓国は、日本が国際法を受容・採用したことに非常に大きな影響を受けたため、日本での国際法の発達を研究することは私にとって欠かせない項目となり、今回の来日に至りました。私は特に、国際法が日韓関係においてどのように適用されたか、に関する資料に興味があります。

日本は国際法を受容と採用という面で、東アジアの中で最も成功した国です。国立国会図書館へ足を運んだことで、国際法の様々な日本語訳版を読み、比較することができました。近代日本社会において国際法がどのように解釈・評価されたのかを知ることができ、それは私の研究にとって最も重要な部分となりました。

一次資料に加え、19世紀日本における国際法の発達についての最新の研究も読むことができました。このテーマに関する韓国語・中国語・英語での二次資料もありますが、そういった研究は依然として限られた範囲内のものでした。このテーマに関しては、日本の研究のほうがより詳しく、発展した内容でした。日本の研究者たちは近年、国際法を思想史の観点から研究することに力を注いでおり、そのことは私の将来の研究にとって非常に大きな刺激となりました。さらに日本での滞在中、森武磨教授が指導教授に付いてくださったこと、そして朝鮮近代史研究において第一線で活躍する二人の研究者にお会いできたことは、非常に光栄でした。お会いした研究者は、東京大学の月脚達彦教授と一橋大学の糟谷憲一教授です。このお三方から、研究についての貴重なアドバイスを頂くことができました。

日本へ来たことは、私にとって最高の宝物になりました。それは、研究における目的を果たせたことばかりでなく、神奈川大学の教授や友人と交流する素晴らしい機会を与えてもらったからです。そのおかげで、日本についてさらに深く理解することができました。

森教授と一緒に研究させていただいたことは、忘れられない経験になりました。森教授は、授業中は聡明な指導者として、そして授業後は仲の良い友人のように接し

てくださいました。森教授は私の研究テーマと関係のある様々な研究者を紹介して下さったり、私が日本語を勉強することをいつも励ましてくださいました。森教授と彼の生徒さんたちと横浜を訪れたことを今でも思い出します。森教授の案内のもと、横浜市イギリス館・外交官の家・港の見える丘公園・山手イタリア山庭園など、横浜開港に関するいくつもの史跡を訪れました。横浜散策のあと、森教授は私たちにパワーポイントを使って横浜開港の歴史について講義をしてくださいました。近代の東アジア国際関係を学ぶ一学生として、港町がどのように発展してきたかを知ることが非常に重要なことでした。この横浜散策は、明治政府が日本にいる外国人を統治しようとして行った外交政策について、より深い理解を与えてくれました。

さらに面白かったことは、横浜散策のあとに森教授の主催により開かれた「忘年会」に生徒さんたちと一緒に参加したことです。現代風の日本の忘年会に参加するのは私にとって初めての経験でした。そこでは日本の大学院生にも会うことができ、とても良い機会でした。この忘年会を通してより多くの友人を作ることができ、さらには日本人の「だらしなさ」も垣間見ることができました。

神奈川大学の歴史民俗資料学研究科の大学院生たちとお会いしたことも、印象に残っています。キャンパス内を案内してくれたり、図書館での本の借り方、研究室でのスキャナーやコピー機の使い方を教えてくれたのも彼らでした。彼らの研究に対する姿勢には非常に感銘を受けました。みんな表立っては言っていないのですが、深夜まで勉強をするというのが彼らの暗黙のルールのようなものでした。私は特に、定年後に再度勉強することを選んだ年上の大学院生たちに感銘を受けました。彼らはいつも熱心な研究を促すリーダーのような

